中日評論

日本外交に重大な試練

アメリカの危機と中国

中嶋嶺雄

インフレの亢進（こうしん）にたいし、公定歩合を一二％にも引き上げるという事態に示されるように、今日のアメリカ社会の危機は深い。私自身、この九月に約二週間、二年ぶりでアメリカを訪れてみて痛感したのは、そのようなアメリカ社会の病理であると同時に、それとの比較における〝ジャパン・アズ・ナンバーワン〟の実感であった。

こうした印象は、まず現象面をとらえれば、いまや犯罪都市といっていいニューヨークのあの落書きだらけの地下鉄をはじめ、ホテル、タクシー、飛行機その他もろもろのサービスに接しただけで、たちどころに実感されるのだが、これにたいして、乗り物、食べ物、街頭の光景その他、日本がいかに行き届いた国であるかが歴然とする。

おもえば、私自身、いまから十数年前、初めてアメリカを訪れたときには、まさにアメリカのすべてが別世界のように目を見張ったものであったけれども、こうして、この十数年間のあいだに状況は日米間ですっかり逆転してしまった。

もとよりアメリカ社会の病理は、そうした現象面だけにとどまらない。ベトナム戦争以来のアメリカの〝敗北〟は、軍事的・戦略的な次元におけるよりも精神的な面においてより深刻であったし、とくにベトナムでの〝敗北〟は、今日のインドシナ情勢を見るにつけ、結局、アメリカの介入と撤退の両者における戦略的誤算ではなかったかという屈折した〝自己批判〟となってアメリカの威信を大きく傷つけてしまっている。

それだけに、アメリカの重要なリーダーたち、つまり東部エスタブリッシュメントは、なにか根本的なところで大きく自信を喪失したまま、偉大なアメリカの建国の理想やアメリカ社会にとってかけがえのない民主主義の伝統さえも、大きく胸を張って支えようとする気概にいまや欠けてしまっているように思われてならない。

このことは、アメリカの文化や生活様式を規定してきた中核的価値（コア・バリュー）としてのWASP（白人、アングロ・サクソン系、プロテスタント）の崩壊現象と表裏するのであろうが、カーター政権に見られる内政・外交上のリーダーシップの喪失は、こうした結果を見ているにもかかわらず前回の大統領選挙では圧倒的多数でカーターをアメリカ国民が選び、いま、それに代わるものとして、腕（すね）に傷をもつエドワード・ケネディしか存在しないという奇（いら）立ちとともに、東部エスタブリッシュメントの混迷をさらに深めている。

ところで私が今回訪米したのは、ワシントンの大西洋評議会（The Atlantic Council）が主宰するアジアの安全保障にかんする共同研究プロジェクトにメンバーの一人として参加するためであり、今回の定期会議では、私が主報告者になって八〇年代の中国とアジアを展望するというハードな重荷を背負っていた。

大西洋評議会（会長は元国務副長官のケニス・ラッシュ氏）は、しばしば重要な政策提言をおこなうことでも知られている一種の外交評議会で、米外交界や国防総省、上院議員などの長老クラスに大学教授などが加わったまさに東部エスタブリッシュメントのシンポルのような民間団体である。

九月十二、十三日の両日おこなわれた今回の会議は、元駐日大使で国務次官をつとめたU・A・ジョンソン氏が議長をつとめ、対ソ封じ込め政策の軍事化という点で戦後アメリカの対外政策にきわめて重大な意味をもった国家安全保障会議の機密文書NSC68作製計画の主査をつとめた元海軍長官・国防副長官でジョージ・ケナンのライバルでもあったポール・ニッツェ氏、アジア協会副会長のロバート・バーネット氏、カリフォルニア大学（バークレー）のロバート・A・スカラピーノ教授、コロンビア大学のジェームズ・W・モーレー教授ら約三十人が出席し、日本からは私と神谷不二慶大教授が参加した。

そして、結論的にいえることは、いまや国際政治においてアメリカの相対的な地位が低下しつつある半面、ソ連の著しい軍事的拡大という脅威に直面しつつあるアメリカが、中国をソ連にたいする対抗勢力としてとらえ、軍事的にも中国が強大化することを望んでいることであり、米・日・中という太平洋横断的連携を対ソ軍事戦略上も形成したいという衝動が強く感じられたことであった。

こうした米・日・中の軍事的連携への道こそ日本にとっては危険な選択であり、日本はこの点でアメリカと同じ立場に立ち得ず、日米安保体制下において、ここに新しい矛盾が生じつつあることを私は強調したのであるが、そのような私の問題提起に論議が集中したことは、私にとっても一つの収穫であった。このようなアメリカにとって、私が指摘したもう一つの論点、つまり中ソ和解への可能性は、まさに考えるのも恐ろしい悪夢であるのか、この点については反論が多かった。いずれにせよ、そのようなアメリカは、八〇年代、中ソ和解の悪夢におびえながら、当面は、中国を軍事的に強化しようとする方向をますます強めるであろう。

去る十月三日、「ニューヨーク・タイムズ」は、米国防総省が対中軍事支援計画を練りつつあることの秘密文書を暴露し、また、近い将来、ブラウン国防長官の訪中が予定されているが、こうした国際政治の潮流のなかで、日本外交はいま、重大な試練に立たされようとしている。

（東京外語大教授）